

# ガイダンスカウンセラーとしての取り組み

小島 和子

(さいたま市、千葉県公立小中学校、私立附属中高スクールカウンセラー)

「A君！ 俺はお前が、数学が苦手なことを知っているよ。でも、小学校の算数ではなく、中学校の数学を教えてやりたいんだ。俺と一緒にやらないか、出て来いよ」

体育館に逃げ込んだA君に、ベテランの数学科の教師が声かけをした。

中学校1年生のA君は、小2からの不登校。さわやか相談室には通い出していた（学校の不登校対策として、学習の保障をするという方針）。このあとA君は、「オレ、明日から数学やるよ。もう逃げないから」と私に言った。この日を境に、A君の自己肯定感は上がっていった。

相談業務かけだしのころのエピソードだ。重篤な家庭環境の中にいたA君が、たくましく成長するための大切なひとコマ。学校生活には、こんな瞬間がたくさんある。私がガイダンスカウンセラーとして、子どもや保護者に、教師と共にかかわることを決意した原体験である。

埼玉県、さいたま市にて、さわやか相談員を14年間、さいたま市特別支援教育相談センターで1年間、職場での経験と研修でたくさんのことを学び、現在、スクールカウンセラー（以下SC）として3年目である。ガイダンスカウンセラーとして「チーム学校」をめざし、より多くの子どもや保護者、教師とかわっていきことの責務を感じ、充実感を覚えている。

私のガイダンスカウンセラーとしての取り組みは、以下のとおりである。

## 1 アセスメント

- ① 予防的な対応：アンケートの実施、ほか
- ② 授業観察・行動観察
- ③ 検査の実施

## 2 個別の対応

- ① 児童生徒
- ② 保護者
- ③ 緊急対応

## 3 グループ対応

- ① クラス、学年、全校

## ② 保護者向け

### 4 コンサルテーション・コーディネーション

- ① 教師へのフィードバック・コンサルテーション
- ② 会議への参加
- ③ 教師・関係機関との連携
- ④ 校内研修
- ⑤ 広報活動

## 1. アセスメント

### ① 予防的な対応……アンケートの実施、ほか

さいたま市では、「こころと生活のアンケート」「人間関係プログラム」が実施され、集計結果から、担任と児童生徒の面接が行われる。SCはこれを受けて、集計結果の読み取りや、行動観察から見えてくるものとの整合性などの意見を伝えている。

「命の支え合いの授業」では、毎年、ゲストティーチャーとして担任と授業をする。指導案はさいたま市で準備されており、さいたま市内小中全校が実施する。内容も素晴らしいうえ、一クラスずつなので、生徒の顔を見ながら反応を確認することができ、観察もしやすい。何よりSCの存在を周知してもらえることが、ありがたい。

千葉県の中学校では、中学1年生向けに、筆者自作のアンケートを実施してもらい、それをもとにした1年生全員面接を実施している。昼休みや放課後に、2～10人程度ずつ実施するのだが、ほかの面接や学校行事などの事情で、1年間を要してしまう。

ほかに、教師の要請や生徒希望の面接は、優先的になる。生徒指導上で教師と連携して取り組む場面で、こうした面接によるアセスメントは、次の展開へのヒントになる。

個人的に抱えたストレスやいじめなど、関係性で困ったとき、誰かに聞いてほしいときに、「大人」につなぐことは大切である。その「大人」のなかには、保護者、教師のほかに、SC（さわやか相談員も含む）も含まれるという学校の体制は、予防的な対応として生かされて

いると感じる。

困り感や不安を抱える児童生徒を、大人が見落とさないよう、普段からのかかわりを大切にしようと、共通理解している。

## ② 授業観察・行動観察

中学校では、会議の中で検討されたケース、先生方からの要望があったケースについて行う。小学校では、その日の勤務に「授業観察」が組み込まれており、特に行動観察対象の児童を中心に、という要望がある。

当該児童生徒の授業への取り組み方、座席の様子、また教室前方から当該児童生徒の表情と視点の観察（眼球の動き）などをする。ほかに教師とのやりとり、周りの児童生徒とのかかわり、掲示物、クラス全体の雰囲気など、全体と個別の両方を観察する。

## ③ 検査の実施

さいたま市では、SCが必要に応じて検査を実施することができる。児童生徒の理解と支援のために、管理職や教師、保護者と相談しながら実施する。

検査の結果から、実際の行動と整合性があるかなど、確認しながら保護者、教師（保護者の了解のもと）にフィードバックする。家庭でのかかわり方やクラスや授業での指導・支援に、また必要な機関との連携にも役立っている。

## 2. 個別の対応

### ① 児童生徒

小学校では、多くの場合担任が児童とのかかわり、そのうえでSCへつなげている。面接では、言語以外にも描画の実施など、ラポールの形成と観察に努める。

中学校、高校では、生徒自身からの要望と先生からの勧めと半々である。自傷、発達障害、精神疾患の発症など、むずかしい問題も抱えたうえでの学校生活。キャリアカウンセリングも含まれる。

### ② 保護者

面接時には、保護者のアセスメントをしながら主訴の確認をする。保護者が実行可能な範囲のなかで、子どもとのかかわりについて、一つだけ宿題と観察をお願いすることもある。次回にその結果を聴いていく。

保護者の自己肯定感やメタ認知の力が上がると、親子関係が安定することが多い。担任から勧められる場合もある。

### ③ 緊急対応

事件・事故が発生してしまった場合に、管理職から要請される。教師、学校としての対応と手順が決められたあと、または同時に相談しながら、SCとしての役割を果たす。

## 3. グループ対応

### ① クラス、学年、全校

グループ対応は中学生がほとんどである。さいたま市ではクラスごとの「命の支え合いの授業」、千葉県の中学校のあるクラスでは、「不登校の生徒がいるクラスでの、当該生徒へのとらえ方」。学年単位では「（いじめを含め）より良いクラスをつくるには」。学校全体では「いじめ撲滅に関するテーマ」など。

講話の時間枠に、なるべくワークやシェアのコーナーを入れ、全体の見通しをもつこと、生徒自身がどのように感じ、どのような行動をとるかを具体的、明確にすることを意図とした。また、事前アンケートをとり、ふりかえりに再度アンケートを実施する場合もあり、SC、教師の評価、反省につなげた。

### ② 保護者向け

小・中学校の新入生の保護者向けに子育て講座、中3の進路決定に向けて、中2の保護者向けの講座、主任児童委員向けの子育て講座などを実施した。

中学校の保護者向けに、希望者だけではあるが、「ハートサポートの会」を年1～2回実施。相談するほどではないが、ほかの保護者の様子も聞きたい、養護教諭やSC、相談員に聞いてみたいなど、ちょっとした保護者の疑問や小さな悩みを共有する目的で、実施している。参加者は少数だが、やわらかい雰囲気であり、継続の要望は出ている。

## 4. コンサルテーション・コーディネーション

### ① 教師へのフィードバック・コンサルテーション

予防的な対応、児童生徒への個別面接、グループ対応、授業観察・行動観察、検査の実施など、児童生徒とのかかわりのあとには、教師とコンサルテーションを行っている。放課後などに教師へフィードバックし、教師の工夫点や課題点などを聴き取り、コンサルテーションをする。

教師の児童生徒への多面的な理解とキャリアカウンセリングから、生活指導、生徒指導につながるようなコンサルテーションを心がけている。

## ② 会議への参加

定例の教育相談の会議では、各学年の教育相談担当からの、生徒の情報を共有する。授業中その他の生活場面での、観察の観点や特質に合ったかかわり方などについて意見を述べたり、情報提供をし、コンサルテーションを行う。教師の困り感を通して、生徒自身が抱えている困難さを明確にして、「誰が・いつ・何をするか」まで検討することを目標にしている。

要請があった場合、学年会議に参加する。思春期の課題と発達課題をもつ、児童生徒の理解やかかわり方はむずかしい。特別支援の観点も含め、情報提供する。小学校と中学校の違い（中学校は教科担任制）を理解したうえで、合理的配慮の形を検討する。また、特別支援の専門機関へのコーディネーションを、必要に応じて行う。

## ③ 教師・関係機関との連携

さいたま市では、H28年度からSSWを教育相談室ごとに、千葉県では同じくSSWを市町村ごとに配置している。小・中学校に定期的に訪問するほか、要請があれば、その学校に訪問できるシステムになっている。家庭への支援が必要なケースは、連携している。

SSWとともにケースの面接を実施し、多面的にアセスメントすることもある。校内の会議で検討のうえ、SSWのほか精神保健福祉士、市の支援課、福祉課、児童相談所、家庭児童相談所など、福祉の専門家も同席でケース会議を実施することもある。

また、教育相談室や学習相談室（地域により名称やシステムは異なる）に通っている児童生徒の様子を聞きながら、コンサルテーションもする。不登校児童生徒への配慮のあり方も情報交換しながら、成長を確認したり、登校に向けたチャンスを検討していく。

## ④ 校内研修

小学校で、夏休み期間の研修会の講師を引き受けている。研修会の内容は、発達障害の特性の理解、支援のヒント、体幹や集中力の成長のヒント、検査結果の見方や支援の方法、クールダウン、やりとり法、機能的アセスメント、教室で使える行動支援、ケーススタディなど。

生徒指導とタイアップした研修では、情報収集部分を教育相談としてSCが担った。行動観察や検査結果からわかること、支援のヒントを提供したうえで、その情報をもとに「担任として児童の課題に対し、どんな指導をするか」を考えてもらい、少人数で検討した。そのあと全体で共通理解した。学年を超えて授業をもつ教科担任や、サポートの教師にとっても、好い機会だった。

## ⑤ 広報活動

さわやか相談員のときには、保護者向けに毎月のおたよりを発行し、生徒向けには中学校内に掲示物を2週間に1回程度、貼り出していた。教師向けの情報提供は、随時出していた。

SCとしては、保護者と生徒、それぞれに向けたおたよりを、学期に2～3回程度出している。保護者向けには、子育てのヒントや情報を。生徒向けには、学校行事や生活、成長にかかわる情報を載せている。「トホホホ語」と称して、私自身の子育ての失敗談と成長を載せている。「そこだけ読んでよ」という生徒がいたり、応援の言葉をかけてくださる保護者もいた。

また、生徒向けの掲示物は、学級担任が教室に貼り出し、ある学年では学年の廊下に掲示してくれた。廊下で立ち止まって読む生徒の姿を見ると、またがんばろうと思った。

最後に、私は諸般の事情から、いろいろな仕事をしてきた。その中で、教育界以外の様子、そこで働く人々、企業のトップに立つ人の苦悩や判断力、何に気を配って、どういうタイミングで顧客にかかわるのがを学んだ。

また私が家庭をもち、子どもが授かり、育児も大変だったところに、自分の社会での役割は何か、やりたいことは何かを考える課題を与えてくれたのも、この時期に出会った人である。

相談業務、カウンセリングを学びに研修会に参加したところで、國分康孝先生の研修を受けた。私はいたく感動し、一字一句も聞きもらさないような気持ちで受講した。「スキルだけでは人を救えない」とおっしゃった先生の言葉が、いまの私を支えている。テストの採点用紙に添えられていた先生からのひと言には、「あなたはすでに一生懸命に行動しているようだ。猛烈に勉強しなさい」とあり、謹んで努力したいと感じた。

私は大事な場面で、家族を含め、すばらしい人との出会いによって、自己実現の機会とポジティブに工夫する力を鍛えてもらった。このたびもニューズレターとして光をあてていただき、感謝している。